

研究

「柏木」考

道 徹 朗

平安時代及びその後の文学において、柏木は兵衛府の官人の異称として、またこの木には葉守の神がいるという点とで有名である。この点について、兵衛の異称がいつ、何故生じたのか、葉守の神とはどんな神か、又その神の存在はいつ頃から認識され出したのか、いろ／＼と問題が多いが、直接の契機となつたのは次に引く大和物語及び後撰和歌集の説話であると考えられる。

良少将兵衛の佐なりけるころ、監の命婦にすみける、女のもとより

かしは木のもりの下草おいぬとも身をいたづらになさずもあらなむ

返し

かしはぎのもりの下草おいのよにかゝるおもひはあらじとぞおもふ

となむいひける。(大和物語二十一一段)

枇杷殿より、としこが家に柏木のありけるを折りにたまへりけり。折らせてかきつけ奉りける

我やどをいつかは君がならのはのならしがほには折りにおこする

御かへし

かしは木に葉守の神のましけるを知らでぞ折りし崇なざるな(大和物語六十八段)

枇杷左大臣よう侍りてならの葉をもとめ侍りければかぬがあひしりて侍りける家にとりにつかはしければ

俊子

我宿をいつ慣してか榎の葉をならし顔には折におこするかへし

枇杷左大臣

榎の葉の葉守の神の坐けるをしらでぞ折りし崇なざるな(後撰集卷十六、雑二)

まず「葉守の神」の歌について考察するに、大和では「かしは木」とあるのに対し、後撰では「ならの葉」とありその上俊子の夫藤原千兼の事にふれている。これについて柏木と榎とは同一物を指しており、葉守の神は俊子の夫千兼を譬えたものとする見方と、柏木と榎とは別なもので、かつ葉守の神も大和では俊子を、後撰では千兼を譬えたものとする見方とが考えられる。

ところで、この歌が詠まれたのは、柏木に葉守の神がいると考える習俗があつたからか、それとも枇杷左大臣藤原

仲平の口から出まかせの戯言によるものであつたらうか。

そのことに触れる前に、柏木と檜が同一物かどうかについて考えてみたい。新撰字鏡は「ナラノ木」に檜・榎・椎・柞・櫛の字を宛てており、そのうち柞にはナラ・ヒツ・シヒ・櫛にはハハソノ木・ナラノ木の訓を付している。次に「カシハ」には柏、「カシハ木」には栂、「ヤマカシハ」には櫛の字を宛てている。なお、榎には「カシノ木」という訓もある。倭名鈔(二十卷本)では櫛・柏をカシハと訓み、櫛にはナラ、柞にはハハソ、椎子にはシヒの訓があるだけである。名義抄では櫛にカシハキ・アフチノキの訓柞にはハハソ・カシ・榎木(クヌギのことか)・シノ木などの訓、櫛にはナラノキ・カシハキの訓がある。以上の三書は成立年代を異にするので、一括して取扱うことには問題があるが、要約すると、ナラ・カシハ・カシ・シイ・ハハソそれにおそらくクヌギなどは大体において同一種類の木であり、その中でも櫛と柏木と柞とはやや近いが、殊に櫛の一種と柏木、櫛の一種と柞とは密接な関係があつたと思われる。今日の植物分類学においても、ナラ(コナラ・ミズナラ・クヌギの類)、カシワ、ブナ、クリなどは落葉樹、カシ、シイは常緑樹のちがいはあるが、同ジブナ科に属している。

これらの植物の親疎関係や、落葉・常緑の問題、それに葉守の神が柏木や櫛の木を守ると考えられた理由などを和

歌史における実例について検討してみよう。まず、安法法師集に

同じ寺に椎の柏木にいみじくなりたるをみて

柏木もこのめも老いて有物を昔の人のみえずも有哉

とあるのによれば、椎木と柏木とを同じものと考へていたとも取れるが、おそらくは、柏木の実が椎の実に似ているで言つたものである。次に狭衣物語卷三に

村雨のおどろ／＼しきに、柏木の下風涼しく吹き入れ

たれば、御簾少し上げて見出し給へるに、櫛柏はげに

いたくもり煩ふも目止まりて、

柏木の葉守の神になどてわが雨もらさじとちぎらざりけむ

とあるのによれば、この頃柏木と櫛柏(櫛の葉がしはと同義語と考えられる)とは同一物を指していたと考えられる。

ところで、玉葉和歌集の次の歌

冬の歌の中に 前関白太政大臣

外面なる櫛の葉がしは枯落ちて時雨をうくる音の寂しさ

(玉葉集卷六、冬歌)

によれば、櫛の葉柏は落葉したと思われるが、後拾遺和歌集の歌

題しらず 曾根好忠

榎とるう月になれば神山の櫛のがしはもとつ葉もなし

(後拾遺集第三、夏)

によれば、前年の葉が四月近くまで枝に残っていたように受け取れる。

次に檜の葉が落葉する事を示す歌には次のような作がある。

落葉有_レ声といふ事をよめる

惟宗隆頼

風吹けば檜の枯葉のそよ／＼と云合せつゝいつか散る覧

(詞花和歌集卷四、冬)

冬夜恋と云ふ事を

前右近大将公頼

露ふりならの落葉に風吹きて物恋しらにさ夜ぞ更け行く

(玉葉和歌集卷十二、恋歌四)

ただし、千載和歌集の次の歌によれば檜の葉は落葉しなかつたとも取れるようである。

山家雪朝といへる心をよめる

大納言経信

朝戸あけて見るぞ寂しき片岡のならの広葉にふれる白雪

(千載集卷六、冬歌)

なお、柏木が落葉したことを示す例歌に新古今和歌集の歌がある。

題しらず

法眼慶算

ときしもあれ冬は葉守の神無月まばらになりぬもりの柏

木(新古今集卷六、冬歌)

次に葉守の神とはどんな神を言うのであろうか。源俊賴は俊頼髓脳において、「葉もりの神とは木の葉をまもる神

の木にはおはするなり」と言ひ、頭昭も袖中抄で「はもりの神とは樹の神也。よろづの木を守神也。」と言ひ、すべての木を守る神と考えているが、同じく袖中抄に記すところによると、家成卿歌合の落葉の題で藤原通憲が「名にしておはば葉守の神にいのりみんはゝその紅葉ちりやのころ」と詠んだのに対し、判者の藤原基俊が大和物語の「かしはぎの葉守の神の」の歌を引いて、「はもりの神ははゝそのかへでの葉まもる神にはあらず」として、柏木だけを守る神と考えていたようである。思うに通憲は柏木・檜・柞は同種類であるのに、なぜ柏木だけ落葉しないのか、柞も散り残るかどうか葉守の神に祈つてみようと言んだものであろう。この話と前に掲げた新古今集の「冬は葉守の神無月」(八代集抄に「折ふし冬は葉守の神もなき月なれば、柏木の森もまばらに散りたると也。」とある。「神がない」と「神無月」とは懸詞。)の歌からすると、葉守の神は落葉を止める神であるとの意識が暗々裡にあつたものと思われ。

ところで、孵化しないで巢に残っている卵を意味する巢守という語があるが、葉守もおそらくは落葉しない葉を指すのであろう。従つて冬になつても色を変えない常緑樹を言うのではないかとの疑問も生じるが、平安中期頃までの歌や物語では葉守の神は柏木又は檜とのみ組み合わされており、かつ枕草子に、「柏木、いとをかし。葉守の神のい

ますらんもかしこし。」とあるのを見ると、葉守の神はブナ科の中でも落葉樹のナラやカシワの類に存在すると考えられていたと見るべきであろう。しかも、完全な落葉樹であればそれは不適當であるが、この類のうちカシワとクヌギとは秋になつても落葉せず褐色になつて枯れたまま枝について冬を越す性質がある。この現象に驚異を感じて葉守の神を想像したのではなからうか。ただし、その事が平安時代の民間習俗であつたのか、それとも、そうした現象に氣づいていた藤原仲平が、葉を惜しみ守つた俊子、ひいては俊子につらなる千兼を葉守の神のようだとからかつたのかどうか確言できないが、おそらくは前者でなかつたらうか。

なお、柏木（櫛の葉がしは）やクヌギは冬になつて黄葉しても落葉しないと云つたが、すべての葉が落葉しないわけではなく、一部は落葉するので、残つた葉に葉守の神を認め、又一部の落葉現象を見て、前述の新古今や玉葉の作者は「冬は葉守の神無月」とか、「櫛の葉がしは枯落ちて」など詠んだと考えられる。こうしたわけで、後撰集の櫛は大和物語の柏木と同一種類の櫛の葉柏を指したものでありしかも櫛にはミズナラ・コナラ・ハハソなど同種の落葉樹があるため、後世になつて櫛の葉の落葉を詠じたり、葉守の神はすべての木を守るといふ考えが生じたりしたものと思われる。

では柏木はいつ、何故に兵衛の異称となつたのであろうか。大日本国語辞典は、一説として「支那の嵩山の古柏を漢の武帝が大将軍に封ぜし故事より、兵衛なども武官なればいふ」との大和物語虚静抄の説を引いているが、それならば柏木は近衛や衛門の異称にも用いそうだが、そうでないのは中国の故事によるものでないからであらう。

柏木を兵衛の異称として用いた、最も古い用例は、前掲の大和物語二十一一段の歌と、次にあげる拾遺和歌集の歌である。

中納言敦忠兵衛佐に侍りける時にしのびていひちぎり
て侍りけることよに聞え侍りにければ 右近
人しれず頼めしことは柏木の杜やしにけむよにふりにけり
(拾遺集卷十九、雑恋)

大和物語に言う良少将良峰仲連と監の命婦との贈答があつたのは、すでに述べたように延長六年から同八年までのことである。ところで、前述の枇杷殿と俊子の贈答はいつのことか不明であるが、これがもし仲平が左兵衛督であつた延喜九年から同廿一年までの間のことであつたら、仲平と葉守の神のいる柏木とが結びついて兵衛の異称が生じたとも、あるいは、昔から柏木は兵衛の異称であつたから、監の命婦も右近もこの語を使用したとも考えられる。

兵衛の異称としての柏木はその後、和歌や散文に広く用

いられた。たとえば、天曆八年頃、右大将道綱母は「かげろふの日記」上巻において、右兵衛佐であつた藤原兼家から求婚のあつたことを「かしはぎの木高きわたりよりかくいはせんとおもふことありけり」と記し、また夫兼家の夜離れを「かしはぎの森の下草くれごとになほたのめとやもるをみるく」と歌っている。

これらは兵衛佐の異称としての例であるが、一条朝以後は同じく兵衛の督や尉をも指すようになったことが、枕草子の「花の木ならぬは」の段に、「柏木、いとをかし、葉守の神のいますらんもかしこし。兵衛の督、佐、尉などいふもをかし」とあるのによつて窺われる。なお兵衛督の異称としての具体例は、次にあげる後拾遺和歌集、玉葉和歌集、拾遺愚草に見える。

左兵衛督経成身まかりにける其いみにいもうとのあつかひなどせむとて師賢の朝臣こもり侍りけるにつかはしける
小左近

よそにきく袖も露けき柏木のもとに雪をおもひこそやれ

(後拾遺集卷十、哀傷)

左兵衛督源経成が薨じたのは治暦二年のことである。

左兵衛督にて侍りける時、別当惟方右兵衛督になりて侍りける慶びいひつかはずとて
前大納言光頼

古へもたぐひもあらじ我が宿に枝をつらぬる柏木のかげこの藤原光頼・惟方兄弟がそろつて左右兵衛督となつたの

は保元三年四月二日のことであつた。次の拾遺愚草の歌はいつ頃の詠かわからないが、鎌倉初期と思われる。

二条の中將近衛づかさにて年たけぬる由述懐の百首に多くよみて程なく右兵衛督になりて且に

柏木は今日や若葉の春にあふ君がみかげの繁き恵に

返し

右兵衛督

春の雨のふりぬと何か思ひけむ恵みに茂き森の柏木

次に兵衛尉の異称としての例は次の一首しか発見できなかった。

堀河の中宮のたくみの蔵人に兵衛のぞうなる人住むと

きしに

柏木の森の下行く自らにくもらばことか人のいふめる、

(相如集)

右の歌は堀河中宮の崩が天元二年であるからそれ以前の詠と思われる。

なお、兵衛佐の異称としての例は前掲のものほかに、

伝大納言殿母上集に

さねかたの兵衛のすけに、あはずべしときゝ給て、少将にてをはしけるほどのことなるべし

かしはぎのもりたにしけきく物をなとかみかさのやまのかひなき

かへし

かしはきもみかさのやまもなつなればしげれどあやなひ
とのしらなく、

この歌は右兵衛佐実方と左少将道綱の官職から見て永観元
年の作であろう。次に新古今和歌集に

兵衛佐に侍りける時五月ばかりによそながら物申しそ
めて遣しける

法性寺入道前摂政太政大臣

時鳥声をばきけど花の枝にまだふみなれぬ物をこそ思へ

かへし

馬 内侍

時鳥忍ぶるものを柏木のもりてもこゑのきこえけるかな

(新古今集、卷十一、恋一)

この歌は道長が右兵衛権佐であつた永観二年から寛和二年
までの頃の作であろう。なお馬内侍集に

兵衛のすけなる人かたらふとみな人きゝてのち中將に
文通はしければ人の聞きていひたる

柏木はあめも人めも繁しとて三笠の山に踏通ふとか

とあるのも、その頃のことであろうか。ちなみに、「三笠
の山」は近衛の中少将の異称である。

このような柏木の異称に関する和歌史的事実によつて、
能因歌枕、俊頼髓脳、和歌童蒙抄、奥儀抄、和歌初学抄、
和歌色葉、八雲御抄、色葉和難集等の歌学書はすべて柏木
を兵衛の異名・異称としている。

能因歌枕(広本)

みかさ山、中少将をよめり、兵衛をばかしはぎとい
ふ。右衛門をば、みかきもりといふ。

俊頼髓脳

兵衛、かしはぎといふ。近衛、みかさのやまといふ

和歌童蒙抄(第四)

兵衛をかしはぎといふ也

奥儀抄(二十三物異名)

中少将、みかさやま、衛門、みかきもり、兵衛、かしはぎ

和歌初学抄(物名)

近衛チカキマボリ ミカサヤマ

中少将ミカサヤマ

衛門ミカキモリ

兵衛カシハギ

和歌色葉(七通用名言者 (七)人倫部)

中少将みかさやま、みかきもり

左右衛門みかきもり

左右兵衛かしはぎ

八雲御抄(異名部)

近衛大将 みかさ山 中少将 ちかきまもりと云。次将

は常事也。大将をも可謂。近衛也。

左右衛門 みかきもり 惣衛士 あきのくるかた 忠岑短
名歎。 右衛門

歌。ゆぎとりおひてと云り 輒負也、ゆぎお
也。ひたる者也。

左右兵衛 かしはぎ。とのべもると云は惣衛府也。

色葉和難集

一、かしは木

和云、かしは木とは兵衛のつかさをいふ。又たどのか
しはをよむ、つねのことなり。ならのはがしはとも。

○、みかさの山と云事

是は少将を云なり。

○、みかきもりと云事

是は左衛門をいふなり。これは大番するに、わうせう
などをば南殿をまもらせてゐたり。さればみかきもり
と云なり。

右の如く歌学書においても近衛と衛門と兵衛の異称はそれ
く異つてゐる。八雲御抄に「とのべもる」は惣衛府の異
称とあるが、壬生忠岑の長歌をはじめとして、続拾遺和歌
集、新千載和歌集の例はすべて衛門を指している。

ふるうたにくはへてたてまつれるなかうた

壬生忠岑

……かくはあれども てるひかり ちかきまもりの 身
なりしを 誰かは秋の くるかたに あさむき出て み
かきより とのへもるみの みかきもり おさくしく
も おもほえず こゝのかさねの なかにては 嵐のか

せも きかざりき…… (古今集卷十九、雑体)

この歌について八代集抄は、「忠岑はもと左近番長也後
に右衛門府生にうつれり」、又「とのへもる身とは右衛門
なり外衛也兵衛を中のへといへは衛門をとのへといふみか
きもりも衛門をいふ」という頭昭の註を引いている。

後鳥羽院に冬月の五首の歌奉りけるに 如願法師

いたづらに今年も暮れぬとのへもる袖の氷に月を重ねて
(続拾遺集卷六、冬歌)

如願法師藤原秀能は在俗の時左衛門尉であつた。

元亨三年七月、内裏にて三首の歌講せられける時、初
秋月といへる事を右衛門督にてつかうまつりける
大納言師賢

雲の上の月も幾夜かなれぬらむ秋来る方の殿上もる身に
(新千載集卷四、秋歌上)

ただ一つ問題なのは綺語抄の説である。その官位部には
よしいき 左右衛門をいふ。左右兵衛をいふ。

新田部貞範自三兵衛府生遷三任近衛将曹歌云、かし
はぎのもりのわたりをうちすぎてみかさの山にわれは来
にけり

みかさやま 中少将をいふ。

とある。「よしいき」という歌語は考えられないので、そ
の例歌から見て「かしはぎ」の誤写と思われるが、それだ
と柏木は兵衛と衛門の異称ということになる。然しながら

これも貞範の歌からして柏木は兵衛府生を指しているから柏木は兵衛のみの異称であり、このあたりの綺語抄には脱文があると考えるのが妥当ではなからうか。

以上のような柏木の異称に関する和歌史の実例に反するのが、大日本国語辞典や大言海をはじめとする諸々の古語辞典や註釈書の説である。それらのほとんどが柏木は兵衛及び衛門の異称としている。このような誤解は何故生じたかというに、源氏物語註釈史の過程においてではないかと考えるので述べてみたい。

周知の如く、源氏物語において光源氏の正妻女三宮と事を起して柏木巻で死去した権大納言は、通称柏木と呼ばれている。彼は少女巻に左少将として登場以来、胡蝶巻で右近衛中将、篝火巻で蔵人頭を兼ね、若菜上巻で宰相兼右衛門督、若菜下巻で中納言兼右衛門督、柏木巻で権大納言となり間もなく死去した。その後は故権大納言又は故衛門督と呼ばれているので、彼は権大納言兼右衛門督であつたと思われるが、紫式部が生存したと思われる、円融朝から三条朝までの實在の人物で権大納言になつて左右衛門督を兼ねた例は全くない。然しながら、源氏物語において故衛門督と呼ばれているのは事実であるから、権大納言に任命されて数日のうちに死去したので、後任が間に合わなかつたのか、あるいは権大納言の職が数日に過ぎなかつたのに反し、衛門督の期間は長かつたので親近者はそう呼んだと解

する外はない。

ところで柏木という人名は、いうまでもなく巻名に依るものであり、巻名は巻中の柏木と落葉宮（少将の君が代つて詠んでいる）との贈答歌

ことならばならしの枝にならさなむ葉守の神の許ありきと

柏木に葉守の神はまさずとも人ならずべき宿のこずゑかによつてゐる。なお、この歌は前掲の大和物語及び後撰集の歌を引いたもので、従つて葉守の神は故衛門督（柏木）にたとえたものである。さて、源氏物語の巻名は作者が附したのではなく、平安末期以後の源氏物語研究者による命名であることについては疑う余地がない。すでに世尊寺伊行の源氏積や無名草子においても巻名がほとんど定まつている。巻名が定まると、作者による人物呼称も巻名によつて改められることは自然のすう勢であろう。その結果、故大納言又は故衛門督と呼ばれた人も、彼について最も印象的な巻である柏木巻に出てくる衛門督、すなわち柏木の衛門督と呼ばれるようになった。無名草子、源氏四十八ものたとへの事、伊勢源氏十二番女合などにも「柏木の衛門督」という語が頻出する。この柏木衛門督という語はさらに柏木と省略された。人名として柏木なる語を用いたのは定家の「奥入」や「源氏四十八ものたとへの事」などが最も古いようであるが、河海抄以後はこの語が一般的に使わ

れるようになった。

かくて、源氏物語に登場する衛門督が柏木と呼ばれるようになったことから、柏木は兵衛のみならず衛門督又は衛門府の官人の異称でもあるという考えが源氏物語註釈者の頭に生じたと思われる。その最初の人は四辻善成であった。彼は河海抄巻十四で「右衛門のかむの君、衛門を柏木と云」と註している。河海抄はその後の源氏註釈書に大きな影響を与えたが、和歌に造詣の深かった一条兼良、三条西公条、北村季吟らは従えなかつたのか、花鳥余情、細流抄、湖月抄にはこの説を引いていない。たゞ、岷江入楚や枕草子旁註は一説として、これを載せている。この河海抄の説が影響したのかどうかかわからないが、賀茂真淵は大和物語直解の中で、前掲の大和物語二十一一段の歌について、「源氏に右衛門督をかしは木といへるを思へば、兵衛は中重、左右衛門は外重なれど、ともに御門守さま同じき故に同じ称ある歟」と述べて、衛門の異称が後に兵衛の異称ともなつた如く考えているようであるが、同じ大和物語の註釈書であつても季吟の抄や虚静抄は柏木を兵衛だけの異称としてゐる。

河海抄や真淵の説は、その後辞書に影響を与えたと思へて、倭訓栞には「かしはぎ、右衛門督を柏木によそへ歌にもよめり」とあり、雅言集覧は真淵の説を引いて「かしはぎ、兵衛・衛門」としてゐる。この雅言集覧が大日本国語

辞典や大言海の説の源をなしたと考えられる。

昭和39・6・3

註「監の命婦をめぐる人々と大和物語の成立に関する一考察」

(国語と国文学昭和三十八年七月号)

附記。脱稿後、玉上琢弥博士が「女子大文学」(国文篇第十五号)の中の御論考「源氏物語作中人物呼び名の論」において、「(6)その人の死歿した巻名によるもの。葵の上・蜻蛉式部卿宮・柏木・薄雲女院

柏木は古系図では柏木権大納言と呼ぶが、後世では柏木右衛門督と呼ぶ。読者の印象に最も強く残るのは右衛門督時代であつて、権大納言になつたのは死ぬ直前だつたからである。が、柏木はもと兵衛の異称だから、柏木右衛門督では矛盾するし、柏木権大納言もそぐわないわけである。もつとも読者がこの人の通称を「柏木」とするに至つたのは、その未亡人の歌「柏木に葉守の神はまさずとも」(柏木の巻二二(二B))によるので、兵衛の異称とは無関係である。ついながら、この人は死後も「右衛門の督」と呼ばれているので(中略)、権大納言任官後も右衛門督をやめていなかつたと見るべきようである。」と述べていられる事を知り、既に拙稿の後半は蛇足の観をまぬがれないが、玉上博士とは別な道から探求を試みたものであるので、掲載することにした次第である。

なお本稿を草するにあたり、本学鶴久助教の貴重な助言を得た。記して謝意を表したい。

枕草子成立考

小方隆子

序

和歌の時代に、そして多くの物語、日記の誕生した時代に、枕草子は敢えて新しい形をもつて書かれた。作者の好みが偶然にこの形をとらせた。いわば物語、日記の一ヴァリエーションとして、文学史に位置するのではなく、もつと積極的な作者の意識を感じるのには当らないだろうか。

歌を中心にした利那の興味が、もはや利那では済されぬものとなつた時、ある人主内容を描く物語が誕生した。そして日記も又或人生を描いた。だが枕草子は自己を語りながら決して人生そのものを描かない。人生そのものを語らない作者、それを幻滅や内部矛盾とは無縁であつたと片付けるのは酷ではないか。すべての作者が己れの心境を語るわけではないし、語りたくない何かがあつたかも知れない。作者が敢えて新しい形で書こうとした。ここに作者の心

を探り、作者の意図を正しく究明しなくては枕草子の作品全体としての把握は成し得ないのではないかと思う。ここに私は枕草子の形を追求してみた。

(一)

枕草子の形態に纏わる成立事情は、まず三巻本、伝能因本巻末にある跋文に窺われる。

執筆にあつた態度と場所、不本意ながらの流布の始末が述べられ、これに留意して五十風、岡博士は、元來他見を度外視した無遠慮な随見随想の記録であるとするが、(註一)中宮

から賜つた冊子であつてみれば、いつの日か徒然の折に中宮のお目を楽ませることも作者は当然考へたであろうし「人なみなみ」の言葉にも読者を意識した作者の姿がみられると思う。「人やは」を真正面から受けとらなくてもいいのではないか。却つて私はそこに筆をおいた作者の謙虚と弁解の交又する複雑な気持がなした、いわば虚構のようなものを感じる。そして一見謙辞であるかのような文に、何か作者の主張が窺い知れるように思う。従來の文学にないものを意図した作者の秘かな意欲が感じられるように思う。

跋にみる長徳二年、経房が持ち出した原本がどんな内容をもつていたかが解明すれば、作者の形への意識もはつきりすると思われる。